

15 海からの贈り物

- 死んだ子が 白布くるに包まれ寝かされている
母親が 傍かたわらで通夜をしている
姑しゅうとめは眠ってしまった 海峡では
疾風はたてが潮流に逆らって吹き荒れている
- だが母親は そんなことみな心中ひそかに笑いとばした 5
「わたしは わが夫つまを海で亡くした
そしてこんどはこの子 静まれ海よ
これ以上 わたしにどんな仕打ちができようか」
- 母親は 死んだわが子をじっと見守る
蠟燭ろうそくの涙が たらりと流れる 10
そして幼な子とわに永遠の別れを告げる唄
魂送たまりの唄を歌おうとした
- 「マリア様がきつとお前を連れて行ってくださるよ
わたしの胸いだに抱いたお前を
マリア様がきつと今宵お前ゆりかごの揺籃を浄めてくださるよ」 15
でも「さあもう行きなさい」とは歌えなかった
- そのときだ 海の方から泣き声が聞こえてきた
だが飛沫しぶきで窓ガラスは曇ったままだった
母親は言った 「お義母さんかあ 聞こえなかったかしら
あれは逝いくのをためらう この子の魂なの」 20
- まどろみつつも 姑しゅうとめは繰りごとをつぶやく
「あれはハリエニシダの茂みで産気づいた雌羊の声だよ
この世に生まれた人の子の
罪も知らない無垢の魂がなぜ泣くものか」
- 「ああ わたしが抱いた このあんよ 25

わたしの乳房ちちを求めた このおてて
どうして 黄泉よみへの道を尋ねて往けようか
どうして 天国の門の掛け金をはずせようか」

母親とその姑しゅうとめは 戸口に敷布を伸べた
小さな布団も重ねた 30
幼な子が寒さと土にまみれぬように
だが遠くの泣き声はやまなかった

母親は掛け金を上げ
じっと目をこらした
そして扉を 無情の海辺のほうへと押し開あけた 35
わが子の魂を 送りだそうと

ちらちらと光るものも 亡霊もなく
精霊もなく 閃光もない
「お義母かあさん 何も聞こえなかったかしら
あれは だれか暗いところからわたしを呼んで泣いているの」 40

まどろみつつも 姑しゅうとめは繰りごとをつぶやく
「あまりの悲しみで お前はおかしくなったのよ
お前にはまだアジサシの鳴き声が 分からないよね
風に流されたカモメの鳴く声も」

「アジサシは 陸おかに帰るわ 45
灰色カモメは 犁すきの後で虫獲りに夢中
わたしが聴いたあの声は 鳥なんかじゃない
ああ お義母かあさん まだ聞こえる」

「静かにおし 静かにおし
坊やは もう大丈夫 30
お前の安らぎを乱すのは 胸の痛み
坊やを無くした腕かいなの虚しさ」

母親は 姑しゅうとめを押しつけ言った
「後生だから どうかかまわないで
どうしても 行かねばならないの」 55

そして母親は 海の呼ぶほうへと急いだ

強風に痛んだ棧橋の足元のあたり

絡まった海草が 折り重なったところに
半刻前なら助けられた命にたどりついた
そこにはもう一つ幼い亡骸があったのだ

60

母親は その子をかき抱き

姑しゅうとめのもとへと急いだ
でもその子はもはや乳房ちちも含まず 応えいらもしなかった
死んだわが子の名で呼べど

溺死した子は 母親の胸に雫を垂らせた

65

実の子は 白布に包まれ冷たく寝かされたまま
「お義母さんかあ せめて二人で神様にお赦しを乞いましょう
この子をあんな暗いところで死なせてしまった罪を」

(榎井幹生訳)